日本ペスタロッチー・フレーベル学会　関西地区研究会
平成 23 年度　第八回課題研究委員会・近畿地区議事録

日時；平成 24 年 6 月 16 日（土）13 時 30 分～17 時 30 分
場所;龍谷大学深草校舎 8 号館 1F　第 5 共同研究室
参加者；松川礼子、田岡由美子、藤井恵美子、篠原いくよ、藤井貴子、澤田真弓、石川道夫
欠席者；宍戸健夫、渡邊満、酒井玲子、荘司泰弘、浅野俊和、柏原栄子、

[研究会の主旨]
2009 年秋スタートの日本 PF 学会の課題研究は、テーマを「子育て支援」とすることになった。従来、どちらかというと教育理論、教育史的な研究に重点を置いてきた本学会が、時代や社会が求めている重要な課題に取り組んでいくという画期的な研究テーマであり、2012 年に政府が予定している幼保一元化を見据えて「子育て支援」の在り方を学会としてどのように提言していくかを課題としている。

1. 研究報告
○田岡由美子「2012 年国際フレーベル学会報告―思想研究から実践へ」

・2012 年、4 月 12-14 日、アイルランドのダブリンのフレーベル教育大学（Froebel College of Education, Dublin）で開催された国際フレーベル学会（International Froebel Society Coference）に、学会事務局の広島大学の鈴木由美子先生を中心に、比治山大学短期大学部の湯地宏樹先生、宮崎学園短期大学の椋木香子先生、大阪観光大学の永瀬美帆先生とともに参加されたとのことで、その参加報告がなされた。
・今回の学会への参加者は 100 人強で、主な参加国は、イギリス、アイルランド、アメリカ、カナダ、ドイツ、スペイン、日本、ロシア、中国などであった。比較的こじんまりとした、しかし、アイリッシュハープによるミニ・コンサートや会食など細やかな配慮がいたるところで感じられる心温まる学会であった。
・発表内容を概観すると、現代の少子化問題や、遊びをどのように展開し学びにつなげて評価するかといった現代の幼児教育現場の状況についての発表と、恩物や『母の歌と愛撫の歌』といったフレーベルの考案した教育方法をいかに現代に活用するかについての発表といったように、大別すると二つの方向性があった。
・鈴木先生は、5 つの Keynote 講演のひとつとして、「幼稚園から小学校への移行の手助けとしての幼稚園でのフレーベルの『恩物』の活用」（The Use od Froebel's "Spielgaben" in a Japanese Kindergarten to aid the Transition from Kindergarten

to Elementary School）というタイトルで講演をされた。田岡、湯地、椋木、永瀬の4人の先生は一緒にシンポジウムで「日本の幼児教育における文化伝承の実践」（The Tradition of Local Culture in Japanese Pre-school Education Practice）というタイトルでそれぞれにプレゼンテーションをされた。最初に、湯地先生が日本の幼稚園の紹介を行い、続いて椋木先生が幼稚園に和太鼓を保育活動として取り入れている事例を紹介、和太鼓を通した子どもの育ちについて発表した。他者の音を聞きながら自己を表現して和太鼓の合奏をするプロセスにおいて子ども達は、相互に協調し、共同して一つのものを作り上げる喜びを知ると共に、全体における部分の重要性を感得し、全体の調和のために自分自身を身体的・精神的にコントロールする力を獲得できる。次に、田岡先生は、地域で行われている地蔵盆を紹介し、地蔵盆が家族以外の地域のさまざまな年齢の大人や人間を超えた地蔵という存在に護られながら育つ機会であり、同時に大人も地蔵盆の運営や行事に参加することを通して、日頃多忙で疎遠になりがちな近隣の人々が地域住民としての連帯感を取り戻す機会であることを述べた。最後に、永瀬先生がフレーベルの「部分的全体」をキーワードにして、それぞれの事例の教育的意味に触れながら、いずれも個々の充実が社会全体の充実へとつながることを示す事例であることを発表した。7，8名の参加者であったフロアーからは、伝統的な祭りを重要視するのであれば、なぜ国民の休日にして、みんなで祝うようにしないのかといった質問や、和太鼓の練習は強制にならないのかといった疑問が出された。質疑応答の中で、常に隣国からの脅威と戦って独立してきたアイルランドでは、国の伝統的行事を大切にしてその国ならではの文化を継承することを学校教育に組み入れ、意識的に行っていることがあきらかにされた。また個々の表現を大切しながら全体としてひとつになることを重視することと、個を滅した全体主義との違いについて意見交換された。

・田岡先生は近年、フレーベルの『母と子の愛撫の歌』についての詳細な研究で学位を取得されたドイツのコンラート先生(Christiane Konrad)のワークショップに参加し、実際にその歌集の中に収められた歌について、歌に添えられた絵を手がかりに各自の理解の仕方をみんなの前で話し、そして歌を歌うという経験を、ビデオ映像を交えて報告された。また現地のフレーベル教育大学の音楽の先生と学生を中心に、『母と子の愛撫の歌』の旋律を、現代風にアレンジして実際に幼稚園や学校で子ども達と歌って楽しんでいる映像も見せていただく機会があり、オーソドックスか現代風かの違いはあるが、『母の歌と愛撫の歌』を現代に伝えていこうとする試みがあることを知ることができたと報告された。この点について、フレーベルの原典にあたりながらその思想や教育方法を明らかにしていく日本でのフレーベル研究を大切にしながらも、それをいかに幼稚園や小学校の現場で活かしていくか、この両方を行っていくことの重要性を実感した学会であったことが述べられた。報告を踏まえて、これからのフレーベル研究のあり方についてさまざまな意見がかわされた。

○石川道夫「育児を支える公共圏の可能性　公園・育児サークル・育児書」

・石川は、1960 年代にドイツの社会哲学者ユルゲン・ハーバーマスが、その著『公共性の構造転換』の中で、人と人のコミュニケーション行為の狭間に生じうる領域として提唱した「公共圏」（der Öffentlichkeit）という概念を手がかりに、公的な制度や権力と家庭に代表されるような個人の親密圏との間にある、誰でもアクセス可能な公共圏について、従来議論されてきたような政治評論、メディア、教育、インターネットコミュニティではなく、保育支援や在宅の高齢者、不登校、引きこもり、障害を持った人たちへの支援を「ケアの公共圏」として一括りにして議論することは出来ないだろうかという提案を行った。
・ハーバーマスは、フランス革命前夜のフランス社会の中で、貴族の夫人が主催するサロン文化や新聞の読めるコーヒーハウスなどを中心に啓蒙文化がどのように浸透し、それが政治文化を生み出していく過程を分析したのだが、このようなこのような影響力は、ケアを忠臣に考えていっても検討することができるだろうということで、大学病院に通院する患者さんたちの利用するバスや、てんかんと知的障害を持った少女とその家族を 12 年間に渡り撮影した土器面たり映画「奈緒ちゃん」の中で、そのお宅の玄関前にある小さな公共の公園、育児書など、施設や空間、メディアの例から、不登校児のフリースペース、患者会など自由に集まった人達による特定の目的を持った集いやグループなどを取り上げ、その分類を試みた。
・公共圏は、制度の非人間的な部分が、現実の問題を抱えた人たちの期待に十分に堪え切れない部分を潤滑剤のように埋めるだけでなく、動的に関わって、個々人の持っている親密圏相互のかかわり方の実際をも変えていく力を持っているのではないだろうかというところまで話が及んだ。

○次回は、12 月 8 日（土曜）13 時半から、今回に引き続き龍谷大学の田岡先生に会場の方をお引き受け願うということになった。場所は、8 号館第 5 共同研究室を予定している。報告者としては、松川、藤井貴子先生が東日本大震災から一年半過ぎての宮城県の被災地の保育現場の様子を、澤田先生が新規保育所の立ち上げの実際という現場の報告をしてくださることになっている。

書記　石川道夫